



Red Hat OpenShift Container Storage 4.8

ストレージリソースの管理および割り当て

クラスターおよびストレージ管理者の管理タスク

Red Hat OpenShift Container Storage 4.8 ストレージリソースの管理および割り当て

クラスターおよびストレージ管理者の管理タスク

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

法律上の通知

Copyright © 2022 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Managing_and_allocating_storage_resources.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本書では、Red Hat OpenShift Container Storage でコアサービスおよびホスト型アプリケーションにストレージを割り当てる方法について説明します。

目次

多様性を受け入れるオープンソースの強化	3
RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)	4
第1章 概要	5
第2章 ストレージクラス	6
2.1. ストレージクラスおよびプールの作成	6
2.2. 永続ボリュームの暗号化のためのストレージクラスの作成	7
第3章 ブロックプール	10
3.1. ブロックプールの作成	10
3.2. 既存プールの更新	10
3.3. プールの削除	11
第4章 OPENSIFT CONTAINER PLATFORM サービスのストレージの設定	12
4.1. OPENSIFT CONTAINER STORAGE を使用するためのイメージレジストリーの設定	12
4.2. OPENSIFT CONTAINER STORAGE を使用するためのモニタリングの設定	14
4.3. OPENSIFT CONTAINER STORAGE のクラスターロギング	17
4.3.1. 永続ストレージの設定	17
4.3.2. OpenShift Container Storage を使用するためのクラスターロギングの設定	18
第5章 OPENSIFT CONTAINER STORAGE を使用した OPENSIFT CONTAINER PLATFORM アプリケーション のサポート	22
第6章 既存の外部 OPENSIFT CONTAINER STORAGE クラスターへのファイルおよびオブジェクトストレージの 追加	24
第7章 RED HAT OPENSIFT CONTAINER STORAGE に専用のワーカーノードを使用する方法	27
7.1. インフラストラクチャーノードの仕組み	27
7.2. インフラストラクチャーノードを作成するためのマシンセット	27
7.3. インフラストラクチャーノードの手動作成	28
第8章 PERSISTENT VOLUME CLAIM (永続ボリューム要求、PVC) の管理	30
8.1. OPENSIFT CONTAINER PLATFORM を使用するためのアプリケーション POD の設定	30
8.2. PERSISTENT VOLUME CLAIM (永続ボリューム要求、PVC) 要求ステータスの表示	31
8.3. PERSISTENT VOLUME CLAIM (永続ボリューム要求、PVC) 要求イベントの確認	32
8.4. PERSISTENT VOLUME CLAIM (永続ボリューム要求、PVC) の拡張	32
8.5. 動的プロビジョニング	34
8.5.1. 動的プロビジョニングについて	34
8.5.2. OpenShift Container Storage の動的プロビジョニング	34
8.5.3. 利用可能な動的プロビジョニングプラグイン	35
第9章 ボリュームスナップショット	37
9.1. ボリュームスナップショットの作成	37
9.2. ボリュームスナップショットの復元	38
9.3. ボリュームスナップショットの削除	40
第10章 ボリュームのクローン作成	42
10.1. クローンの作成	42
第11章 CONTAINER STORAGE INTERFACE (CSI) コンポーネントの配置の管理	43

多様性を受け入れるオープンソースの強化

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[弊社の CTO である Chris Wright のメッセージ](#) を参照してください。

RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)

弊社のドキュメントについてのご意見をお聞かせください。ドキュメントの改善点があれば、ぜひお知らせください。フィードバックをお寄せいただくには、以下をご確認ください。

- 特定の部分についての簡単なコメントをお寄せいただく場合は、以下をご確認ください。
 1. ドキュメントの表示が **Multi-page HTML** 形式になっていることを確認してください。ドキュメントの右上隅に **Feedback** ボタンがあることを確認してください。
 2. マウスカーソルを使用して、コメントを追加するテキストの部分を強調表示します。
 3. 強調表示されたテキストの下に表示される **Add Feedback** ポップアップをクリックします。
 4. 表示される指示に従ってください。
- より詳細なフィードバックをお寄せいただく場合は、Bugzilla のチケットを作成してください。
 1. [Bugzilla](#) の Web サイトに移動します。
 2. **Component** セクションで、**documentation** を選択します。
 3. **Description** フィールドに、ドキュメントの改善に向けたご提案を記入してください。ドキュメントの該当部分へのリンクも追加してください。
 4. **Submit Bug** をクリックします。

第1章 概要

本書では、ストレージを作成し、設定し、Red Hat OpenShift Container Storage のコアサービスまたはホスト型アプリケーションに割り当てる方法について説明します。

- [2章 ストレージクラス](#) カスタムのストレージクラスを作成する方法を説明します。
- [3章 ブロックプール](#) ブロックプールの作成、更新、および削除方法に関する情報を提供します。
- [4章 OpenShift Container Platform サービスのストレージの設定](#) コアとなる OpenShift Container Platform サービスに OpenShift Container Storage を使用する方法を説明します。
- [5章 OpenShift Container Storage を使用した OpenShift Container Platform アプリケーションのサポート](#) OpenShift Container Storage を使用するように OpenShift Container Platform アプリケーションを設定する方法についての情報を提供します。
- [既存の外部 OpenShift Container Storage クラスタへのファイルおよびオブジェクトストレージの追加](#)
- [7章 Red Hat OpenShift Container Storage に専用のワーカーノードを使用する方法](#) Red Hat OpenShift Container Storage に専用のワーカーノードを使用する方法についての情報を提供します。
- [8章 Persistent Volume Claim \(永続ボリューム要求、PVC\) の管理](#) Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) の要求の管理とそれらの要求への対応の自動化に関する情報を提供します。
- [9章 ボリュームスナップショット](#) ボリュームスナップショットを作成し、復元し、削除する方法を説明します。
- [10章 ボリュームのクローン作成](#) ボリュームのクローンを作成する方法を説明します。
- [11章 Container Storage Interface \(CSI\) コンポーネントの配置の管理](#) 容認を設定してノードでコンテナストレージのインターフェイスコンポーネントを起動する方法についての情報を提供します。

第2章 ストレージクラス

OpenShift Container Storage Operator は、使用されるプラットフォームに応じてデフォルトのストレージクラスをインストールします。このデフォルトストレージクラスは Operator によって所有され、制御されるため、削除したり変更したりすることはできません。ただし、カスタムストレージクラスを作成して他のストレージリソースを使用したり、アプリケーションに異なる動作を提供したりできます。



注記

カスタムストレージクラスは、**外部モード** の OpenShift Container Storage クラスタではサポートされません。

2.1. ストレージクラスおよびプールの作成

既存のプールを使用してストレージクラスを作成するか、またはストレージクラスの作成中にストレージクラスの新規プールを作成できます。

前提条件

- OpenShift Container Platform の Web コンソールにログインしており、OpenShift Container Storage クラスタが **Ready** 状態にあることを確認します。

手順

1. **Storage** → **Storage Classes** をクリックします。
2. **Create Storage Class** をクリックします。
3. ストレージクラスの **Name** および **Description** を入力します。
4. Reclaim Policy について **Delete** または **Retain** のいずれかを選択します。デフォルトでは、**Delete** が選択されます。
5. 永続ボリュームのプロビジョニングに使用されるプラグインである RBD Provisioner を選択します。
6. 一覧から既存の **ストレージプール** を選択するか、または新規プールを作成します。

新規プールの作成

- a. **Create New Pool** をクリックします。
- b. **Pool name** を入力します。
- c. Data Protection Policy として **2-way-Replication** または **3-way-Replication** を選択します。
- d. データを圧縮する必要がある場合は、**Enable compression** を選択します。
圧縮を有効にするとアプリケーションのパフォーマンスに影響がある可能性があり、書き込まれるデータがすでに圧縮または暗号化されている場合は効果的ではない可能性があります。圧縮を有効にする前に書き込まれたデータは圧縮されません。
- e. **Create** をクリックして新規ストレージプールを作成します。

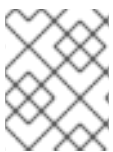
- f. プールの作成後に **Finish** をクリックします。
7. (オプション) **Enable Encryption** チェックボックスを選択します。
8. **Create** をクリックしてストレージクラスを作成します。

2.2. 永続ボリュームの暗号化のためのストレージクラスの作成

以下の手順を使用して、永続ボリュームの暗号化用に外部の鍵管理システム (KMS) を使用して暗号化対応のストレージクラスを作成します。永続ボリュームの暗号化は RBD PV の場合にのみ利用できます。

前提条件

- OpenShift Container Storage クラスターが **Ready** 状態にある。
- 外部の鍵管理システム (KMS) で、以下を実行します。
 - トークンのあるポリシーが存在し、Vault のキー値のバックエンドパスが有効にされていることを確認します。 [Enabling key value and policy in Vault](#) を参照してください。
 - Vault サーバーで署名済みの証明書を使用していることを確認します。
- 以下のようにテナントの namespace にシークレットを作成します。
 - OpenShift Container Platform Web コンソールで、 **Workloads** → **Secrets** に移動します。
 - **Create** → **Key/value secret** をクリックします。
 - **Secret Name** を **ceph-csi-kms-token** として入力します。
 - **Key** を **token** として入力します。
 - **Value** を入力します。これは Vault のトークンです。 **Browse** をクリックしてトークンが含まれるファイルを選択し、アップロードするか、またはテキストボックスにトークンを直接入力します。
 - **Create** をクリックします。



注記

トークンは、**ceph-csi-kms-token** を使用するすべての暗号化された PVC が削除された後にのみ削除できます。

手順

1. **Storage** → **Storage Classes** に移動します。
2. **Create Storage Class** をクリックします。
3. ストレージクラスの **Name** および **Description** を入力します。
4. **Reclaim Policy** について Delete (削除) または Retain (保持) のいずれかを選択します。デフォルトで、Delete (削除) が選択されます。

5. 永続ボリュームをプロビジョニングするために使用されるプラグインである **RBD Provisioner** `openshift-storage.rbd.csi.ceph.com` を選択します。
6. ボリュームデータが保存される **Storage Pool** をリストから選択するか、新規プールを作成します。
7. **Enable Encryption** チェックボックスを選択します。
 - a. **Key Management Service Provider** はデフォルトで Vault に設定されます。
 - b. Vault の **Service Name**、Vault サーバーのホストの **Address** ('https://<hostname または ip>')、および **Port number** を入力します。
 - c. **Advanced Settings** を展開して、Vault 設定に基づいて追加の設定および証明書の詳細を入力します。
 - i. OpenShift Container Storage 専用かつ特有のキー値のシークレットパスを **Backend Path** に入力します。
 - ii. (オプション) **TLS Server Name** および **Vault Enterprise Namespace** を入力します。
 - iii. それぞれの PEM でエンコードされた証明書ファイルをアップロードして、**CA Certificate**、**Client Certificate**、および **Client Private Key** を指定します。
 - iv. **Save** をクリックします。
 - d. **Connect** をクリックします。
8. 外部鍵管理サービスの接続の詳細を確認します。情報を変更するには、**Change connection details** をクリックし、フィールドを編集します。
9. **Create** をクリックします。
10. Hashicorp Vault 設定により、バックエンドパスによって使用される キー/値 (KV) シークレットエンジン API バージョンの自動検出が許可されない場合は、`configmap` を編集して **VAULT_BACKEND** パラメーターを追加します。



注記

VAULT_BACKEND は、バックエンドパスに関連付けられた KV シークレットエンジン API のバージョンを指定するために `configmap` に追加されるオプションのパラメーターです。値がバックエンドパスに設定されている KV シークレットエンジン API バージョンと一致していることを確認します。一致しない場合には、永続ボリューム要求 (PVC) の作成時に失敗する可能性があります。

- a. 新規に作成されたストレージクラスによって使用されている **encryptionKMSID** を特定します。
 - i. OpenShift Web コンソールで、**Storage Storage** → **Storage Classes** に移動します。
 - ii. **Storage class 名** → **YAML** タブをクリックします。
 - iii. ストレージクラスによって使用されている **encryptionKMSID** を取得します。以下に例を示します。

encryptionKMSID: 1-vault

- b. OpenShift Web コンソールで **Workloads** → **ConfigMaps** に移動します。
- c. KMS 接続の詳細を表示するには、**csi-kms-connection-details** をクリックします。
- d. configmap を編集します。
 - i. アクションメニュー (⋮) → **Edit ConfigMap** をクリックします。
 - ii. 以前に特定した **encryptionKMSID** に設定されるバックエンドに応じて、**VAULT_BACKEND** パラメーターを追加します。
VAULT_BACKEND パラメーターとして、KV シークレットエンジン API バージョン1 の場合は **kv** を、KV シークレットエンジン API バージョン2 の場合は **kv-v2** を、それぞれ割り当てることができます。

以下に例を示します。

```
kind: ConfigMap
apiVersion: v1
metadata:
  name: csi-kms-connection-details
[...]
data:
  1-vault: >-
  {
    "KMS_PROVIDER": "vaulttokens",
    "KMS_SERVICE_NAME": "vault",
    [...]
    "VAULT_BACKEND": "kv-v2"
  }
```

- iii. **Save** をクリックします。



重要

Red Hat はテクノロジーパートナーと連携して、本書をお客様へのサービスとして提供します。ただし、Red Hat では、Hashicorp 製品のサポートを提供していません。この製品に関するテクニカルサポートについては、[Hashicorp](#) にお問い合わせください。

次のステップ

- ストレージクラスを使用して、暗号化された永続ボリュームを作成できます。詳細は、[Persistent Volume Claim \(永続ボリューム要求、PVC\) の管理](#) を参照してください。

第3章 ブロックプール

OpenShift Container Storage Operator は、使用されるプラットフォームに応じてデフォルトストレージプールのセットをインストールします。これらのデフォルトストレージプールは Operator によって所有され、制御されるため、削除したり変更したりすることはできません。OpenShift Container Platform を使用して、以下の機能を提供するストレージクラスにマップする複数のカスタムストレージプールを作成できます。

- それぞれに高可用性のあるアプリケーションを有効にして、2つのレプリカを持つ永続ボリュームを使用できるようにします。これにより、アプリケーションのパフォーマンスが向上する可能性があります。
- 圧縮が有効にされているストレージクラスを使用して永続ボリューム要求の領域を節約します。



注記

複数のブロックプールは、**外部モード**の OpenShift Container Storage クラスターではサポートされません。

3.1. ブロックプールの作成

前提条件

- 管理者として OpenShift Container Platform Web コンソールにログインしている必要があります。

手順

1. **Operators** → **Installed Operators** をクリックします。
2. **OpenShift Container Storage Operator** → **Block Pools** タブ → **Create Block Pool** をクリックします。
3. **Pool name** を入力します。
4. **Data protection policy** を **2-way Replication** または **3-way Replication** のいずれかとして選択します。
5. **Volume Type** を選択します。
6. (オプション) データを圧縮する必要がある場合は、**Enable compression** チェックボックスを選択します。
圧縮を有効にするとアプリケーションのパフォーマンスに影響がある可能性があり、書き込まれるデータがすでに圧縮または暗号化されている場合は効果的ではない可能性があります。圧縮を有効にする前に書き込まれたデータは圧縮されません。
7. **Create** をクリックします。

3.2. 既存プールの更新

前提条件

- 管理者として OpenShift Container Platform Web コンソールにログインしている必要があります。

手順

1. **Operators** → **Installed Operators** をクリックします。
2. **OpenShift Container Storage Operator** → **Block Pools** をクリックします。
3. 更新するプールの末尾でアクションメニュー (⋮) をクリックします。
4. **Edit Block Pool** をクリックします。
5. 以下のようにフォームの詳細を変更します。
 - a. **Data protection policy** を 2-way Replication または 3-way Replication のいずれかに変更します。
 - b. 圧縮オプションを有効または無効にします。
圧縮を有効にするとアプリケーションのパフォーマンスに影響がある可能性があり、書き込まれるデータがすでに圧縮または暗号化されている場合は効果的ではない可能性があります。圧縮を有効にする前に書き込まれたデータは圧縮されません。
6. **Save** をクリックします。

3.3. プールの削除

以下の手順を使用して、OpenShift Container Storage のプールを削除します。

前提条件

- 管理者として OpenShift Container Platform Web コンソールにログインしている必要があります。

手順

1. **Operators** → **Installed Operators** をクリックします。
2. **OpenShift Container Storage Operator** → **Block Pools** タブをクリックします。
3. 削除するプールの末尾でアクションメニュー (⋮) をクリックします。
4. **Delete Block Pool** をクリックします。
5. **Delete** をクリックしてプールの削除を確認します。



注記

プールが PVC にバインドされる場合、削除できません。このアクティビティを実行する前に、すべてのリソースの割り当てを解除する必要があります。

第4章 OPENSIFT CONTAINER PLATFORM サービスのストレージの設定

OpenShift Container Storage を使用して、イメージレジストリー、モニターリング、およびロギングなどの OpenShift Container Platform サービスのストレージを提供できます。

これらのサービスのストレージを設定するプロセスは、OpenShift Container Storage デプロイメントで使用されるインフラストラクチャーによって異なります。



警告

これらのサービスに十分なストレージ容量があることを常に確認してください。これらの重要なサービスのストレージ領域が不足すると、クラスターは動作しなくなり、復元が非常に困難になります。

Red Hat は、これらのサービスのキューレーションおよび保持期間を短く設定することを推奨します。詳細は、OpenShift Container Platform ドキュメントの [Monitoring ガイドの Configuring the Curator schedule](#) と [Modifying retention time for Prometheus metrics data](#) を参照してください。

これらのサービスのストレージ領域が不足する場合は、Red Hat カスタマーサポートにお問い合わせください。

4.1. OPENSIFT CONTAINER STORAGE を使用するためのイメージレジストリーの設定

OpenShift Container Platform は、クラスターで標準ワークロードとして実行される、組み込まれたコンテナイメージレジストリーを提供します。通常、レジストリーはクラスター上にビルドされたイメージの公開ターゲットとして、またクラスター上で実行されるワークロードのイメージのソースとして使用されます。

このセクションの手順に従って、OpenShift Container Storage をコンテナイメージレジストリーのストレージとして設定します。AWS では、レジストリーのストレージを変更する必要はありません。ただし vSphere およびベアメタルプラットフォームの場合は、OpenShift Container Storage 永続ボリュームに対してストレージを変更することが推奨されます。



警告

このプロセスでは、データを既存イメージレジストリーから新規イメージレジストリーに移行しません。既存のレジストリーにコンテナイメージがある場合、このプロセスを完了する前にレジストリーのバックアップを作成し、このプロセスの完了時にイメージを再登録します。

前提条件

- OpenShift Web コンソールへの管理者アクセスがある。
- OpenShift Container Storage Operator が **openshift-storage** namespace にインストールされ、実行されている。OpenShift Web コンソールで、**Operators** → **Installed Operators** をクリックし、インストールされた Operator を表示します。
- イメージレジストリー Operator が **openshift-image-registry** namespace にインストールされ、実行されている。OpenShift Web コンソールで、**Administration** → **Cluster Settings** → **Cluster Operators** をクリックしてクラスター Operator を表示します。
- プロビジョナー **openshift-storage.cephfs.csi.ceph.com** を持つストレージクラスが利用可能である。OpenShift Web コンソールで、**Storage** → **Storage Classes** をクリックし、利用可能なストレージクラスを表示します。

手順

1. 使用するイメージレジストリーの Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) を作成します。
 - a. OpenShift Web コンソールで、**Storage** → **Persistent Volume Claims** をクリックします。
 - b. **Project** を **openshift-image-registry** に設定します。
 - c. **Create Persistent Volume Claim** をクリックします。
 - i. 上記で取得した利用可能なストレージクラス一覧から、プロビジョナー **openshift-storage.cephfs.csi.ceph.com** で **Storage Class** を指定します。
 - ii. Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) の **Name** を指定します (例: **ocs4registry**)。
 - iii. **Shared Access (RWX)** の **Access Mode** を指定します。
 - iv. 100 GB 以上の **Size** を指定します。
 - v. **Create** をクリックします。
新規 Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) のステータスが **Bound** として一覧表示されるまで待機します。
2. クラスターのイメージレジストリーを、新規の Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) を使用するように設定します。
 - a. **Administration** → **Custom Resource Definitions** をクリックします。
 - b. **imageregistry.operator.openshift.io** グループに関連付けられた **Config** カスタムリソース定義をクリックします。
 - c. **Instances** タブをクリックします。
 - d. クラスターインスタンスの横にある **Action メニュー (⋮)** → **Edit Config** をクリックします。
 - e. イメージレジストリーの新規 Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) を追加します。
 - i. 以下を **spec:** の下に追加し、必要に応じて既存の **storage:** セクションを置き換えます。

```
storage:
  pvc:
    claim: <new-pvc-name>
```

以下に例を示します。

```
storage:
  pvc:
    claim: ocs4registry
```

ii. **Save** をクリックします。

3. 新しい設定が使用されていることを確認します。

- a. **Workloads** → **Pods** をクリックします。
- b. **Project** を **openshift-image-registry** に設定します。
- c. 新規 **image-registry-*** Pod が **Running** のステータスと共に表示され、以前の **image-registry-*** Pod が終了していることを確認します。
- d. 新規の **image-registry-*** Pod をクリックし、Pod の詳細を表示します。
- e. **Volumes** までスクロールダウンし、**registry-storage** ボリュームに新規 Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) に一致する **Type** があることを確認します (例: **ocs4registry**)。

4.2. OPENSIFT CONTAINER STORAGE を使用するためのモニターリングの設定

OpenShift Container Storage は、Prometheus および Alert Manager で設定されるモニターリングスタックを提供します。

このセクションの手順に従って、OpenShift Container Storage をモニターリングスタックのストレージとして設定します。



重要

ストレージ領域が不足すると、モニターリングは機能しません。モニターリング用に十分なストレージ容量があることを常に確認します。

Red Hat は、このサービスの保持期間を短く設定することを推奨します。詳細は、OpenShift Container Platform ドキュメントの Monitoring guide の [Modifying retention time for Prometheus metrics data](#) を参照してください。

前提条件

- OpenShift Web コンソールへの管理者アクセスがある。
- OpenShift Container Storage Operator が **openshift-storage** namespace にインストールされ、実行されている。OpenShift Web コンソールで、**Operators** → **Installed Operators** をクリックし、インストールされた Operator を表示します。

- モニタリング Operator が **openshift-monitoring** namespace にインストールされ、実行されている。OpenShift Web コンソールで、**Administration** → **Cluster Settings** → **Cluster Operators** をクリックし、クラスター Operator を表示します。
- プロビジョナー **openshift-storage.rbd.csi.ceph.com** を持つストレージクラスが利用可能である。OpenShift Web コンソールで、**Storage** → **Storage Classes** をクリックし、利用可能なストレージクラスを表示します。

手順

1. OpenShift Web コンソールで、**Workloads** → **Config Maps** に移動します。
2. **Project** ドロップダウンを **openshift-monitoring** に設定します。
3. **Create Config Map** をクリックします。
4. 以下の例を使用して新規の **cluster-monitoring-config** Config Map を定義します。
山括弧 (<, >) 内の内容を独自の値に置き換えます (例: **retention: 24h** または **storage: 40Gi**)。

storageClassName、をプロビジョナー **openshift-storage.rbd.csi.ceph.com** を使用する **storageclass** に置き換えます。以下の例では、**storageclass** の名前は **ocs-storagecluster-ceph-rbd** です。

cluster-monitoring-config Config Map の例

```
apiVersion: v1
kind: ConfigMap
metadata:
  name: cluster-monitoring-config
  namespace: openshift-monitoring
data:
  config.yaml: |
    prometheusK8s:
      retention: <time to retain monitoring files, e.g. 24h>
      volumeClaimTemplate:
        metadata:
          name: ocs-prometheus-claim
        spec:
          storageClassName: ocs-storagecluster-ceph-rbd
          resources:
            requests:
              storage: <size of claim, e.g. 40Gi>
    alertmanagerMain:
      volumeClaimTemplate:
        metadata:
          name: ocs-alertmanager-claim
        spec:
          storageClassName: ocs-storagecluster-ceph-rbd
          resources:
            requests:
              storage: <size of claim, e.g. 40Gi>
```

5. **Create** をクリックして、設定マップを保存し、作成します。

検証手順

1. Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) が Pod にバインドされていることを確認します。
 - a. **Storage** → **Persistent Volume Claims** に移動します。
 - b. **Project** ドロップダウンを **openshift-monitoring** に設定します。
 - c. 5 つの Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) が **Bound** (バインド) の状態で表示され、3 つの **alertmanager-main-*** Pod および 2 つの **prometheus-k8s-*** Pod に割り当てられていることを確認します。

作成済みのバインドされているストレージのモニタリング

Project: openshift-monitoring ▼

Persistent Volume Claims

Create Persistent Volume Claim Filter by name...

0 Pending 5 Bound 0 Lost Select All Filters 5 Items

Name ↑	Namespace ↓	Status ↓	Persistent Volume ↓	Requested ↓
my-alertmanager-claim-alertmanager-main-0	openshift-monitoring	Bound	pvc-d00428a5-0ce6-11ea-8fe8-023bdfa29edc	40Gi
my-alertmanager-claim-alertmanager-main-1	openshift-monitoring	Bound	pvc-d00be111-0ce6-11ea-8fe8-023bdfa29edc	40Gi
my-alertmanager-claim-alertmanager-main-2	openshift-monitoring	Bound	pvc-d01ac717-0ce6-11ea-8fe8-023bdfa29edc	40Gi
my-prometheus-claim-prometheus-k8s-0	openshift-monitoring	Bound	pvc-ce290f1b-0ce6-11ea-8fe8-023bdfa29edc	40Gi
my-prometheus-claim-prometheus-k8s-1	openshift-monitoring	Bound	pvc-ce361010-0ce6-11ea-8fe8-023bdfa29edc	40Gi

2. 新規の **alertmanager-main-*** Pod が **Running** 状態で表示されることを確認します。
 - a. **Workloads** → **Pods** に移動します。
 - b. 新規の **alertmanager-main-*** Pod をクリックし、Pod の詳細を表示します。
 - c. **Volumes** にスクロールダウンし、ボリュームに新規 Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) のいずれかに一致する **Type ocs-alertmanager-claim** があることを確認します (例: **ocs-alertmanager-claim-alertmanager-main-0**)。

alertmanager-main-* Pod に割り当てられた Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC)

Volumes

Name ↓	Mount Path ↓	SubPath ↓	Type	Permissions ↓	Utilized By ↓
config-volume	/etc/alertmanager/config		alertmanager-main	Read/Write	alertmanager
ocs-alertmanager-claim	/alertmanager	alertmanager.db	ocs-alertmanager-claim-alertmanager-main-0	Read/Write	alertmanager

3. 新規 **prometheus-k8s-*** Pod が **Running** 状態で表示されることを確認します。
 - a. 新規 **prometheus-k8s-*** Pod をクリックし、Pod の詳細を表示します。

- b. **Volumes** までスクロールダウンし、ボリュームに新規の Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) のいずれかに一致する **Type ocs-prometheus-claim** があることを確認します (例: **ocs-prometheus-claim-prometheus-k8s-0**)。

prometheus-k8s-* Pod に割り当てられた Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC)

Name	Mount Path	SubPath	Type	Permissions	Utilized By
config-out	/etc/prometheus/config_out		Container Volume	Read-only	prometheus
ocs-prometheus-claim	/prometheus	prometheus-db	PVC ocs-prometheus-claim-prometheus-k8s-0	Read/Write	prometheus

4.3. OPENSIFT CONTAINER STORAGE のクラスターロギング

クラスターロギングをデプロイして、各種の OpenShift Container Platform サービスについてのログを集計できます。クラスターロギングのデプロイ方法については、[Deploying cluster logging](#) を参照してください。

OpenShift Container Platform の初回のデプロイメントでは、OpenShift Container Storage はデフォルトで設定されず、OpenShift Container Platform クラスターはノードから利用可能なデフォルトストレージのみに依存します。OpenShift ロギング (ElasticSearch) のデフォルト設定を OpenShift Container Storage に対応されるように編集し、OpenShift Container Storage でサポートされるロギング (Elasticsearch) を設定できます。

重要

これらのサービスに十分なストレージ容量があることを常に確認してください。これらの重要なサービスのストレージ領域が不足すると、ロギングアプリケーションは動作しなくなり、復元が非常に困難になります。

Red Hat は、これらのサービスのキュレーションおよび保持期間を短く設定することを推奨します。詳細は、OpenShift Container Platform ドキュメントで [クラスターロギング Curator](#) について参照してください。

これらのサービスのストレージ領域が不足している場合は、Red Hat カスタマーポータルにお問い合わせください。

4.3.1. 永続ストレージの設定

ストレージクラス名およびサイズパラメーターを使用して、Elasticsearch クラスターの永続ストレージクラスおよびサイズを設定できます。Cluster Logging Operator は、これらのパラメーターに基づいて、Elasticsearch クラスターの各データノードについて Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) を作成します。以下に例を示します。

```
spec:
  logStore:
    type: "elasticsearch"
  elasticsearch:
    nodeCount: 3
  storage:
    storageClassName: "ocs-storagecluster-ceph-rbd"
    size: "200G"
```

この例では、クラスター内の各データノードが **200GiB** の **ocs-storagecluster-ceph-rbd** ストレージを要求する Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) にバインドされるように指定します。

それぞれのプライマリーシャードは単一のレプリカによってサポートされます。シャードのコピーはすべてのノードにレプリケートされ、常に利用可能となり、冗長性ポリシーにより2つ以上のノードが存在する場合にコピーを復元できます。Elasticsearch レプリケーションポリシーについての詳細は、[About deploying and configuring cluster logging](#) の [Elasticsearch レプリケーションポリシー](#) について参照してください。



注記

ストレージブロックを省略すると、デプロイメントはデフォルトのストレージでサポートされます。以下に例を示します。

```
spec:
  logStore:
    type: "elasticsearch"
  elasticsearch:
    nodeCount: 3
    storage: {}
```

詳細は、[Configuring cluster logging](#) を参照してください。

4.3.2. OpenShift Container Storage を使用するためのクラスターロギングの設定

このセクションの手順に従って、OpenShift Container Storage を OpenShift クラスターロギングのストレージとして設定します。



注記

OpenShift Container Storage でロギングを初めて設定する際にすべてのログを取得できます。ただし、ロギングをアンインストールして再インストールすると、古いログが削除され、新しいログのみが処理されます。

前提条件

- OpenShift Web コンソールへの管理者アクセスがある。
- OpenShift Container Storage Operator が **openshift-storage** namespace にインストールされ、実行されている。
- Cluster Logging Operator が **openshift-logging** namespace にインストールされ、実行されている。

手順

1. OpenShift Web コンソールの左側のペインから **Administration** → **Custom Resource Definitions** をクリックします。
2. Custom Resource Definitions ページで、**ClusterLogging** をクリックします。
3. Custom Resource Definition Overview ページで、Actions メニューから **View Instances** を選択するか、または **Instances** タブをクリックします。
4. Cluster Logging ページで、**Create Cluster Logging** をクリックします。
データを読み込むためにページを更新する必要がある場合があります。

5. YAML において、`storageClassName`、をプロビジョナー **openshift-storage.rbd.csi.ceph.com** を使用する **storageclass** に置き換えます。以下の例では、`storageclass` の名前は **ocs-storagecluster-ceph-rbd** です。

```
apiVersion: "logging.openshift.io/v1"
kind: "ClusterLogging"
metadata:
  name: "instance"
  namespace: "openshift-logging"
spec:
  managementState: "Managed"
  logStore:
    type: "elasticsearch"
    elasticsearch:
      nodeCount: 3
      storage:
        storageClassName: ocs-storagecluster-ceph-rbd
        size: 200G # Change as per your requirement
        redundancyPolicy: "SingleRedundancy"
  visualization:
    type: "kibana"
    kibana:
      replicas: 1
  curation:
    type: "curator"
    curator:
      schedule: "30 3 * * *"
  collection:
    logs:
      type: "fluentd"
      fluentd: {}
```

OpenShift Container Storage ノードにテイントのマークが付けられている場合、ロギング用に daemonset Pod のスケジューリングを有効にするために容認を追加する必要があります。

```
spec:
  [...]
  collection:
    logs:
      fluentd:
        tolerations:
          - effect: NoSchedule
            key: node.ocs.openshift.io/storage
            value: 'true'
        type: fluentd
```

6. **Save** をクリックします。

検証手順

1. Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) が **elasticsearch** Pod にバインドされていることを確認します。
 - a. **Storage** → **Persistent Volume Claims** に移動します。

- b. **Project** ドロップダウンを **openshift-logging** に設定します。
- c. Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) が **elasticsearch-*** Pod に割り当てられ、**Bound** (バインド) の状態で表示されることを確認します。

図4.1 作成済みのバインドされたクラスターロギング

Name	Namespace	Status	Persistent Volume	Requested
elasticsearch-elasticsearch-cdm-9r624biv-1	openshift-logging	Bound	pvc-8993013d-1a6e-11ea-8d2f-027bataf61a	200G
elasticsearch-elasticsearch-cdm-9r624biv-2	openshift-logging	Bound	pvc-89947c90-1a6e-11ea-8d2f-027bataf61a	200G
elasticsearch-elasticsearch-cdm-9r624biv-3	openshift-logging	Bound	pvc-8995f57-1a6e-11ea-8d2f-027bataf61a	200G

2. 新規クラスターロギングが使用されていることを確認します。
 - a. **Workload** → **Pods** をクリックします。
 - b. プロジェクトを **openshift-logging** に設定します。
 - c. 新規の **elasticsearch-*** Pod が **Running** 状態で表示されることを確認します。
 - d. 新規の **elasticsearch-*** Pod をクリックし、Pod の詳細を表示します。
 - e. **Volumes** までスクロールダウンし、elasticsearch ボリュームに新規 Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) に一致する **Type** があることを確認します (例: **elasticsearch-elasticsearch-cdm-9r624biv-3**)。
 - f. Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) の名前をクリックし、PersistentVolumeClaim Overview ページでストレージクラス名を確認します。

注記

Elasticsearch Pod に割り当てられる PV の詳細シナリオを回避するために、キュレーターの時間を短く設定して使用するようしてください。

Curator を、保持設定に基づいて Elasticsearch データを削除するように設定できます。以下の 5 日間のインデックスデータの保持期間をデフォルトとして設定することが推奨されます。

```
config.yaml: |
  openshift-storage:
    delete:
      days: 5
```

詳細は、[Curation of Elasticsearch Data](#) を参照してください。



注記

Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) がサポートするクラスターロギングをアンインストールするには、それぞれのデプロイメントガイドのアンインストールについての章に記載されている、クラスターロギング Operator の OpenShift Container Storage からの削除についての手順を使用します。

第5章 OPENSIFT CONTAINER STORAGE を使用した OPENSIFT CONTAINER PLATFORM アプリケーションのサ ポート

OpenShift Container Platform のインストール時に OpenShift Container Storage を直接インストールすることはできません。ただし、Operator Hub を使用して OpenShift Container Platform を既存の OpenShift Container Platform にインストールし、OpenShift Container Platform アプリケーションを OpenShift Container Storage でサポートされるように設定することができます。

前提条件

- OpenShift Container Platform がインストールされ、OpenShift Web コンソールへの管理者アクセスがある。
- OpenShift Container Storage が **openshift-storage** namespace にインストールされ、実行されている。

手順

1. OpenShift Web コンソールで、以下のいずれかを実行します。

- **Workloads → Deployments** をクリックします。
Deployments ページで、以下のいずれかを実行できます。
 - 既存のデプロイメントを選択し、**Action** メニュー(:) から **Add Storage** オプションをクリックします。
 - 新規デプロイメントを作成してからストレージを追加します。
 - i. **Create Deployment** をクリックして新規デプロイメントを作成します。
 - ii. 要件に応じて **YAML** を編集し、デプロイメントを作成します。
 - iii. **Create** をクリックします。
 - iv. ページ右上の **Actions** ドロップダウンメニューから **Add Storage** を選択します。
- **Workloads → Deployment Configs** をクリックします。
Deployment Configs ページで、以下のいずれかを実行できます。
 - 既存のデプロイメントを選択し、**Action** メニュー(:) から **Add Storage** オプションをクリックします。
 - 新規デプロイメントを作成してからストレージを追加します。
 - i. **Create Deployment Config** をクリックし、新規デプロイメントを作成します。
 - ii. 要件に応じて **YAML** を編集し、デプロイメントを作成します。
 - iii. **Create** をクリックします。
 - iv. ページ右上の **Actions** ドロップダウンメニューから **Add Storage** を選択します。

2. Add Storage ページで、以下のオプションのいずれかを選択できます。

- **Use existing claim** オプションをクリックし、ドロップダウンリストから適切な PVC を選

択します。

- **Create new claim** オプションをクリックします。
 - a. **Storage Class** ドロップダウンリストから適切な **CephFS** または **RBD** ストレージクラスを選択します。
 - b. Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) の名前を指定します。
 - c. ReadWriteOnce (RWO) または ReadWriteMany (RWX) アクセスモードを選択します。



注記

ReadOnlyMany (ROX) はサポートされないため、非アクティブになります。

- d. 必要なストレージ容量のサイズを選択します。



注記

ブロック PV を拡張することはできますが、Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) の作成後にストレージ容量のサイズを縮小することはできません。

3. コンテナ内のマウントパスボリュームのマウントパスとサブパス (必要な場合) を指定します。
4. **Save** をクリックします。

検証手順

1. 設定に応じて、以下のいずれかを実行します。
 - **Workloads** → **Deployments** をクリックします。
 - **Workloads** → **Deployment Configs** をクリックします。
2. 必要に応じてプロジェクトを設定します。
3. ストレージを追加したデプロイメントをクリックして、デプロイメントの詳細を表示します。
4. **Volumes** までスクロールダウンし、デプロイメントに、割り当てた Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) に一致する **Type** があることを確認します。
5. Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) の名前をクリックし、Persistent Volume Claim Overview ページでストレージクラス名を確認します。

第6章 既存の外部 OPENSIFT CONTAINER STORAGE クラスターへのファイルおよびオブジェクトストレージの追加

OpenShift Container Storage が外部モードで設定されている場合に、Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) および Object Bucket Claim (オブジェクトバケット要求) 向けにストレージを提供する方法は複数あります。

- ブロックストレージ用の Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) は、外部の Red Hat Ceph Storage クラスターから直接提供されます。
- ファイルストレージ用の Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) は、メタデータサーバー (MDS) を外部の Red Hat Ceph Storage クラスターに追加して提供できます。
- オブジェクトストレージのオブジェクトバケット要求は、Multicloud Object Gateway を使用するか、または Ceph Object Gateway を外部の Red Hat Ceph Storage クラスターに追加して提供できます。

以下のプロセスを使用して、ブロックストレージだけを提供するために最初にデプロイされていたファイルストレージ (メタデータサーバー 使用)、オブジェクトストレージ (Ceph Object Gateway 使用) または両方を外部の OpenShift Container Storage クラスターに追加します。

前提条件

- OpenShift Container Storage 4.7 が OpenShift Container Platform バージョン 4.7 以降にインストールされ、実行されている。また、外部モードの OpenShift Storage Cluster が **Ready** 状態にある。
- 外部の Red Hat Ceph Storage クラスターが以下のいずれかまたは両方で設定されている。
 - オブジェクトストレージ用に OpenShift Container Platform クラスターがアクセスできる Ceph Object Gateway (RGW) エンドポイント
 - ファイルストレージ用のメタデータサーバー (MDS) プール
- 外部の OpenShift Container Storage クラスターのデプロイメント時に **ceph-external-cluster-details-exporter.py** スクリプトで使用されるパラメーターを把握している。

手順

1. 以下のコマンドを使用して **ceph-external-cluster-details-exporter.py** Python スクリプトの OpenShift Container Storage 4.6 バージョンをダウンロードします。

```
oc get csv $(oc get csv -n openshift-storage | grep ocs-operator | awk '{print $1}') -n
openshift-storage -o
jsonpath='{.metadata.annotations.external\features\.ocs\.openshift\.io/export-script}' | base64
--decode > ceph-external-cluster-details-exporter.py
```

2. 更新パーミッションは、外部の Red Hat Ceph Storage クラスターのクライアントノードで **ceph-external-cluster-details-exporter.py** を実行して、外部の Red Hat Ceph Storage クラスターに制限を課します。これを行うには、Red Hat Ceph Storage の管理者に問い合わせる必要がある場合があります。

```
# python3 ceph-external-cluster-details-exporter.py --upgrade \
--run-as-user=ocs-client-name \
--rgw-pool-prefix rgw-pool-prefix
```

--run-as-user

OpenShift Container Storage 4.5 のデプロイメント時に使用されるクライアント名。別のクライアント名が設定されていない場合は、デフォルトのクライアント名 **client.healthchecker** を使用します。

--rgw-pool-prefix

Ceph Object Gateway プールに使用する接頭辞。デフォルトの接頭辞を使用している場合は、省略できます。

3. 外部の Red Hat Ceph Storage クラスターから設定詳細を生成して保存します。

- a. 外部の Red Hat Ceph Storage クラスターのクライアントノードで **ceph-external-cluster-details-exporter.py** を実行して、設定の詳細を生成します。

```
# python3 ceph-external-cluster-details-exporter.py --rbd-data-pool-name rbd-block-pool-name --monitoring-endpoint ceph-mgr-prometheus-exporter-endpoint --monitoring-endpoint-port ceph-mgr-prometheus-exporter-port --run-as-user ocs-client-name --rgw-endpoint rgw-endpoint --rgw-pool-prefix rgw-pool-prefix
```

--monitoring-endpoint

OpenShift Container Storage クラスターからアクセスできるアクティブな Ceph Manager の IP アドレス。

--monitoring-endpoint-port

Ceph Manager Prometheus Exporter エンドポイントのポート。

--run-as-user

OpenShift Container Storage 4.5 のデプロイメント時に使用されるクライアント名。別のクライアント名が設定されていない場合は、デフォルトのクライアント名 **client.healthchecker** を使用します。

--rgw-endpoint

このパラメーターを指定して OpenShift Container Storage の Ceph Object Gateway でオブジェクトストレージをプロビジョニングします (任意のパラメーター)。

--rgw-pool-prefix

Ceph Object Gateway プールに使用する接頭辞。デフォルトの接頭辞を使用している場合は、省略できます。

ユーザーパーミッションは、以下のように更新されます。

```
caps: [mgr] allow command config
caps: [mon] allow r, allow command quorum_status, allow command version
caps: [osd] allow rwx pool=default.rgw.meta, allow r pool=.rgw.root, allow rw pool=default.rgw.control, allow rx pool=default.rgw.log, allow x pool=default.rgw.buckets.index
```

**注記**

Ceph Object Gateway の詳細 (指定されている場合) 以外の全パラメーター (任意の引数を含む) は、OpenShift Container Storage を外部モードでデプロイした時に使用したものと同じです。

- b. スクリプトの出力を **external-cluster-config.json** ファイルに保存します。以下の出力例では、生成された設定変更を太字で示しています。

```
{
  "name": "rook-ceph-mon-endpoints", "kind": "ConfigMap", "data": {
    "data": "xxx.xxx.xxx.xxx:xxxx", "maxMonId": "0", "mapping": {}
  },
  "name": "rook-ceph-mon", "kind": "Secret", "data": {
    "admin-secret": "admin-secret", "fsid": "<fs-id>", "mon-secret": "mon-secret"
  },
  "name": "rook-ceph-operator-creds", "kind": "Secret", "data": {
    "userID": "client.healthchecker", "userKey": "<user-key>"
  },
  "name": "rook-csi-rbd-node", "kind": "Secret", "data": {
    "userID": "csi-rbd-node", "userKey": "<user-key>"
  },
  "name": "ceph-rbd", "kind": "StorageClass", "data": {
    "pool": "ceph-rbd"
  },
  "name": "monitoring-endpoint", "kind": "CephCluster", "data": {
    "MonitoringEndpoint": "xxx.xxx.xxx.xxx", "MonitoringPort": "xxxx"
  },
  "name": "rook-csi-rbd-provisioner", "kind": "Secret", "data": {
    "userID": "csi-rbd-provisioner", "userKey": "<user-key>"
  },
  "name": "rook-csi-cephfs-provisioner", "kind": "Secret", "data": {
    "adminID": "csi-cephfs-provisioner", "adminKey": "<admin-key>"
  },
  "name": "rook-csi-cephfs-node", "kind": "Secret", "data": {
    "adminID": "csi-cephfs-node", "adminKey": "<admin-key>"
  },
  "name": "cephfs", "kind": "StorageClass", "data": {
    "fsName": "cephfs", "pool": "cephfs_data"
  },
  "name": "ceph-rgw", "kind": "StorageClass", "data": {
    "endpoint": "xxx.xxx.xxx.xxx:xxxx", "poolPrefix": "default"
  }
}
```

4. 生成された JSON ファイルをアップロードします。
 - a. OpenShift Web コンソールにログインします。
 - b. **Workloads** → **Secrets** をクリックします。
 - c. **プロジェクト** を **openshift-storage** に設定します。
 - d. **rook-ceph-external-cluster-details** をクリックします。
 - e. **Actions** (:) → **Edit Secret** をクリックします。
 - f. **Browse** をクリックして **external-cluster-config.json** ファイルをアップロードします。
 - g. **Save** をクリックします。

検証手順

- **Storage** → **Overview** → **Block and File** をクリックし、OpenShift Container Storage クラスターの正常性を確認します。
- ファイルストレージ用のメタデータサーバー (MDS) を追加した場合:
 - a. **Workloads** → **Pods** をクリックして、**csi-cephfsplugin-*** Pod が新規作成され、状態が **Running** であることを確認します。
 - b. **Storage** → **Storage Classes** をクリックして **ocs-external-storagecluster-cephfs** ストレージクラスが作成されていることを確認します。
- オブジェクトストレージ用に Ceph Object Gateway を追加した場合:
 - a. **Storage** → **Storage Classes** をクリックして **ocs-external-storagecluster-ceph-rgw** ストレージクラスが作成されていることを確認します。
 - b. OpenShift Web コンソールの左側のペインから **Storage** → **Overview** をクリックし、**Object** タブをクリックします。**Status** カードで Object Service に緑色のチェックアイコンが表示されていることを確認します。

第7章 RED HAT OPENSIFT CONTAINER STORAGE に専用のワーカーノードを使用する方法

インフラストラクチャーノードを使用して Red Hat OpenShift Container Storage リソースをスケジュールすると、Red Hat OpenShift Container Platform サブスクリプションコストを節約できます。**infra** ノードロールのラベルのある Red Hat OpenShift Container Platform (RHOCP) ノードには OpenShift Container Storage サブスクリプションが必要ですが、RHOCP サブスクリプションは必要ありません。

マシン API サポートの有無にかかわらず複数の環境全体で一貫性を維持することが重要です。そのため、いずれの場合でも、worker または infra のいずれかのラベルが付けられたノードの特別なカテゴリーや、両方のロールを使用できるようにすることが強く推奨されます。詳細は、「[インフラストラクチャーノードの手動作成](#)」セクションを参照してください。

7.1. インフラストラクチャーノードの仕組み

OpenShift Container Storage で使用するインフラストラクチャーノードにはいくつかの属性があります。ノードが RHOCP エンタイトルメントを使用しないようにするには、**infra** ノードロールのラベルが必要です。**infra** ノードロールラベルは、OpenShift Container Storage を実行するノードには OpenShift Container Storage エンタイトルメントのみが必要となるようにします。

- **node-role.kubernetes.io/infra** のラベル

infra ノードが OpenShift Container Storage リソースのみをスケジュールできるようにするには、**NoSchedule** effect のある OpenShift Container Storage テイントを追加する必要があります。

- **node.ocs.openshift.io/storage="true"** のテイント

RHOCP サブスクリプションコストが適用されないように、ラベルは RHOCP ノードを **infra** ノードとして識別します。テイントは、OpenShift Container Storage 以外のリソースがテイントのマークが付けられたノードでスケジュールされないようにします。

OpenShift Container Storage サービスの実行に使用されるインフラストラクチャーノードに必要なテイントおよびラベルの例:

```
spec:
  taints:
  - effect: NoSchedule
    key: node.ocs.openshift.io/storage
    value: "true"
  metadata:
    creationTimestamp: null
  labels:
    node-role.kubernetes.io/worker: ""
    node-role.kubernetes.io/infra: ""
    cluster.ocs.openshift.io/openshift-storage: ""
```

7.2. インフラストラクチャーノードを作成するためのマシンセット

マシン API が環境でサポートされている場合には、インフラストラクチャーノードのプロビジョニングを行うマシンセットのテンプレートにラベルを追加する必要があります。ラベルをマシン API によって作成されるノードに手動で追加するアンチパターンを回避します。これを実行することは、デプロイメントで作成される Pod にラベルを追加することに似ています。いずれの場合も、Pod/ノードが失敗する場合、置き換え用の Pod/ノードには適切なラベルがありません。



注記

EC2 環境では、3つのマシンセットが必要です。それぞれは、異なるアベイラビリティゾーン (us-east-2a、us-east-2b、us-east-2c など) でインフラストラクチャーノードをプロビジョニングするように設定されます。現時点で、OpenShift Container Storage は4つ以上のアベイラビリティゾーンへのデプロイをサポートしていません。

以下の Machine Set テンプレートのサンプルは、インフラストラクチャーノードに必要な適切なテイントおよびラベルを持つノードを作成します。これは OpenShift Container Storage サービスを実行するために使用されます。

```
template:
  metadata:
    creationTimestamp: null
  labels:
    machine.openshift.io/cluster-api-cluster: kb-s25vf
    machine.openshift.io/cluster-api-machine-role: worker
    machine.openshift.io/cluster-api-machine-type: worker
    machine.openshift.io/cluster-api-machineset: kb-s25vf-infra-us-west-2a
  spec:
    taints:
    - effect: NoSchedule
      key: node.ocs.openshift.io/storage
      value: "true"
  metadata:
    creationTimestamp: null
    labels:
      node-role.kubernetes.io/infra: ""
      cluster.ocs.openshift.io/openshift-storage: ""
```



重要

インフラストラクチャーノードにテイントを追加する場合は、fluentd Pod など、他のワークロードのテイントにも容認を追加する必要があります。詳細は、Red Hat ナレッジベースのソリューション記事 [OpenShift 4 のインフラストラクチャーノード](#) を参照してください。

7.3. インフラストラクチャーノードの手動作成

マシン API が環境内でサポートされない場合にのみ、ラベルはノードに直接適用される必要があります。手動作成では、OpenShift Container Storage サービスをスケジュールするために少なくとも3つの RHOCP ワーカーノードが利用可能であり、これらのノードに CPU およびメモリーリソースが十分にある必要があります。RHOCP サブスクリプションコストの発生を防ぐには、以下が必要です。

```
oc label node <node> node-role.kubernetes.io/infra=""
oc label node <node> cluster.ocs.openshift.io/openshift-storage=""
```

また、**NoSchedule** OpenShift Container Storage テイントを追加することも、**infra** ノードが OpenShift Container Storage リソースのみをスケジュールし、その他の OpenShift Container Storage ワークロードを拒否できるようにするために必要です。

```
oc adm taint node <node> node.ocs.openshift.io/storage="true":NoSchedule
```




警告

ノードロール `node-role.kubernetes.io/worker=""` は削除しないでください。

`node-role.kubernetes.io/worker=""` ノードロールを削除すると、OpenShift スケジューラーおよび MachineConfig リソースの両方に変更が加えられない場合に問題が発生する可能性があります。

すでに削除されている場合は、各 **infra** ノードに再度追加する必要があります。`node-role.kubernetes.io/infra=""` ノードロールおよび OpenShift Container Storage テイントを追加するだけで、エンタイトルメント免除要件を満たすことができます。

第8章 PERSISTENT VOLUME CLAIM (永続ボリューム要求、PVC) の管理

8.1. OPENSIFT CONTAINER PLATFORM を使用するためのアプリケーション POD の設定

このセクションの手順に従って、OpenShift Container Storage をアプリケーション Pod のストレージとして設定します。

前提条件

- OpenShift Web コンソールへの管理者アクセスがある。
- OpenShift Container Storage Operator が **openshift-storage** namespace にインストールされ、実行されている。OpenShift Web コンソールで、**Operators** → **Installed Operators** をクリックし、インストールされた Operator を表示します。
- OpenShift Container Storage が提供するデフォルトのストレージクラスが利用可能である。OpenShift Web コンソールで **Storage** → **Storage Class** をクリックし、デフォルトのストレージクラスを表示します。

手順

1. 使用するアプリケーションの Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) を作成します。
 - a. OpenShift Web コンソールで、**Storage** → **Persistent Volume Claims** をクリックします。
 - b. アプリケーション Pod の **Project** を設定します。
 - c. **Create Persistent Volume Claim** をクリックします。
 - i. OpenShift Container Storage によって提供される **Storage Class** を指定します。
 - ii. PVC **Name** (例: **myclaim**) を指定します。
 - iii. 必要な **Access Mode** を選択します。
 - iv. Rados Block Device (RBD) の場合、**Access mode** が ReadWriteOnce (**RWO**) であれば、必須の **Volume mode** を選択します。デフォルトのボリュームモードは、**Filesystem** です。
 - v. アプリケーション要件に応じて **Size** を指定します。
 - vi. **Create** をクリックし、PVC のステータスが **Bound** になるまで待機します。
2. 新規または既存のアプリケーション Pod を新規 PVC を使用するよう設定します。
 - 新規アプリケーション Pod の場合、以下の手順を実行します。
 - i. **Workloads** → **Pods** をクリックします。
 - ii. 新規アプリケーション Pod を作成します。

- iii. **spec:** セクションで、**volume:** セクションを追加し、新規 PVC をアプリケーション Pod のボリュームとして追加します。

```
volumes:
  - name: <volume_name>
    persistentVolumeClaim:
      claimName: <pvc_name>
```

以下に例を示します。

```
volumes:
  - name: mypd
    persistentVolumeClaim:
      claimName: myclaim
```

- 既存のアプリケーション Pod の場合、以下の手順を実行します。
 - i. **Workloads** → **Deployment Configs** をクリックします。
 - ii. アプリケーション Pod に関連付けられた必要なデプロイメント設定を検索します。
 - iii. **Action menu (⋮)** → **Edit Deployment Config** をクリックします。
 - iv. **spec:** セクションで、**volume:** セクションを追加し、新規 PVC をアプリケーション Pod のボリュームとして追加し、**Save** をクリックします。

```
volumes:
  - name: <volume_name>
    persistentVolumeClaim:
      claimName: <pvc_name>
```

以下に例を示します。

```
volumes:
  - name: mypd
    persistentVolumeClaim:
      claimName: myclaim
```

3. 新しい設定が使用されていることを確認します。
 - a. **Workloads** → **Pods** をクリックします。
 - b. アプリケーション Pod の **Project** を設定します。
 - c. アプリケーション Pod が **Running** ステータスで表示されていることを確認します。
 - d. アプリケーション Pod 名をクリックし、Pod の詳細を表示します。
 - e. **Volumes** セクションまでスクロールダウンし、ボリュームに新規 Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) に一致する **Type** があることを確認します (例: **myclaim**)。

8.2. PERSISTENT VOLUME CLAIM (永続ボリューム要求、PVC) 要求ステータスの表示

以下の手順を使用して、PVC 要求のステータスを表示します。

前提条件

- OpenShift Container Storage への管理者アクセス。

手順

1. OpenShift Web コンソールにログインします。
2. **Storage** → **Persistent Volume Claims** をクリックします。
3. **Filter** テキストボックスを使用して、必要な PVC 名を検索します。また、一覧を絞り込むために Name または Label で PVC の一覧をフィルターすることもできます。
4. 必要な PVC に対応する **Status** 列を確認します。
5. 必要な **Name** をクリックして PVC の詳細を表示します。

8.3. PERSISTENT VOLUME CLAIM (永続ボリューム要求、PVC) 要求イベントの確認

以下の手順を使用して、Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) 要求イベントを確認し、これに対応します。

前提条件

- OpenShift Web コンソールへの管理者アクセス。

手順

1. OpenShift Web コンソールにログインします。
2. **Storage** → **Overview** → **Block and File** をクリックします。
3. **Inventory** カードを見つけ、エラーのある PVC の数を確認します。
4. **Storage** → **Persistent Volume Claims** をクリックします。
5. **Filter** テキストボックスを使用して、必要な PVC を検索します。
6. PVC 名をクリックし、**Events** に移動します。
7. 必要に応じて、または指示に応じてイベントに対応します。

8.4. PERSISTENT VOLUME CLAIM (永続ボリューム要求、PVC) の拡張

OpenShift Container Storage 4.6 以降では、Persistent Volume Claim (永続ボリューム要求、PVC) を拡張する機能が導入され、永続ストレージリソース管理の柔軟性が向上します。

拡張は、以下の永続ボリュームでサポートされます。

- ボリュームモードが **Filesystem** の Ceph File System (CephFS) をベースとする PVC (ReadWriteOnce (RWO) および ReadWriteMany (RWX) アクセス)。
- ボリュームモードが **Filesystem** の Ceph RADOS Block Device (Ceph RBD) をベースとする PVC (ReadWriteOnce (RWO) アクセス)。

- ボリュームモードが **Block** の Ceph RADOS Block Device (Ceph RBD) をベースとする PVC (ReadWriteOnce (RWO) アクセス)。



注記

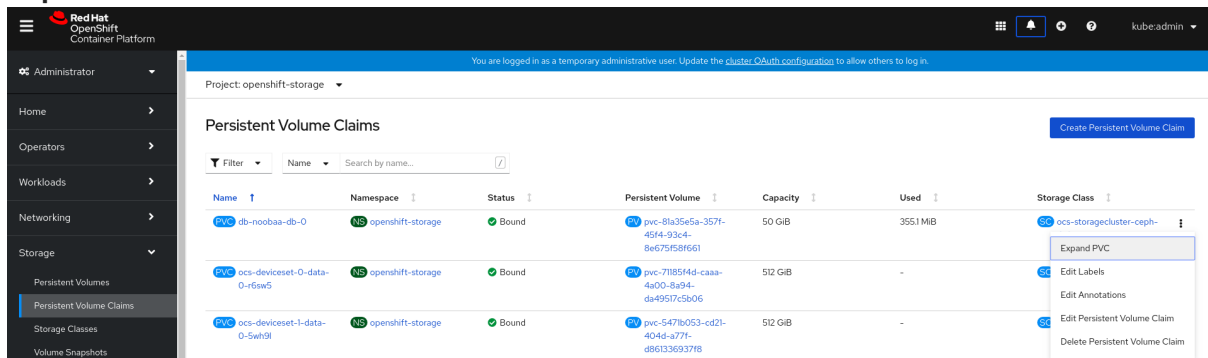
PVC の拡張は OSD、MON、および暗号化された PVC ではサポートされません。

前提条件

- OpenShift Web コンソールへの管理者アクセス。

手順

1. OpenShift Web コンソールで、**Storage** → **Persistent Volume Claims** に移動します。
2. 拡張する Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) の横にある Action メニュー (⋮) をクリックします。
3. **Expand PVC** をクリックします。



4. Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) の新しいサイズを選択してから、**Expand** をクリックします。

Expand Persistent Volume Claim

Increase the capacity of claim `db-noobaa-db-0`. This can be a time-consuming process.

Size *

5. 拡張を確認するには、PVC の詳細ページに移動し、**Capacity** フィールドでサイズが正しく要求されていることを確認します。



注記

Ceph RADOS Block Device (RBD) に基づいて PVC を拡張する場合、PVC がまだ Pod に割り当てられていない場合は、PVC の詳細ページで **Condition type** は **FileSystemResizePending** になります。ボリュームをマウントすると、ファイルシステムのサイズ変更が正常に実行され、新しいサイズが **Capacity** フィールドに反映されます。

8.5. 動的プロビジョニング

8.5.1. 動的プロビジョニングについて

StorageClass リソースオブジェクトは、要求可能なストレージを記述し、分類するほか、要求に応じて動的にプロビジョニングされるストレージのパラメーターを渡すための手段を提供します。

StorageClass オブジェクトは、さまざまなレベルのストレージおよびストレージへのアクセスを制御するための管理メカニズムとしても機能します。クラスター管理者 (**cluster-admin**) またはストレージ管理者 (**storage-admin**) は、ユーザーが基礎となるストレージボリュームソースに関する詳しい知識なしに要求できる StorageClass オブジェクトを定義し、作成します。

OpenShift Container Platform の永続ボリュームフレームワークはこの機能を有効にし、管理者がクラスターに永続ストレージをプロビジョニングできるようにします。フレームワークにより、ユーザーは基礎となるインフラストラクチャーの知識がなくてもこれらのリソースを要求できるようになります。

OpenShift Container Platform では、数多くのストレージタイプを永続ボリュームとして使用することができます。これらはすべて管理者によって静的にプロビジョニングされますが、一部のストレージタイプは組み込みプロバイダーとプラグイン API を使用して動的に作成できます。

8.5.2. OpenShift Container Storage の動的プロビジョニング

Red Hat OpenShift Container Storage は、コンテナ環境向けに最適化されたソフトウェアで定義されるストレージです。これは OpenShift Container Platform の Operator として実行され、コンテナの統合され、単純化された永続ストレージの管理を可能にします。

OpenShift Container Storage は、以下を含む各種のストレージタイプをサポートします。

- データベースのブロックストレージ
- 継続的な統合、メッセージングおよびデータ集約のための共有ファイルストレージ
- アーカイブ、バックアップおよびメディアストレージのオブジェクトストレージ

バージョン 4 では、Red Hat Ceph Storage を使用して永続ボリュームをサポートするファイル、ブロック、およびオブジェクトストレージを提供し、Rook.io を使用して永続ボリュームおよび要求のプロビジョニングを管理し、オーケストレーションします。NooBaa はオブジェクトストレージを提供し、その Multicloud Gateway は複数のクラウド環境でのオブジェクトのフェデレーションを可能にします (テクノロジープレビューとしてご利用いただけます)。

OpenShift Container Storage 4 では、RADOS Block Device (RBD) および Ceph File System (CephFS) の Red Hat Ceph Storage Container Storage Interface (CSI) ドライバーが動的プロビジョニング要求を処理します。PVC 要求が動的に送信される場合、CSI ドライバーでは以下のオプションを使用できません。

- ボリュームモードが **Block** の Ceph RBD をベースとする PVC (ReadWriteOnce (RWO) および ReadWriteMany (RWX) アクセス) を作成します。

- ボリュームモードが **Filesystem** の Ceph RBD をベースとする PVC (ReadWriteOnce (RWO) アクセス) を作成します。
- ボリュームモードが **Filesystem** の CephFS をベースとする PVC (ReadWriteOnce (RWO) および ReadWriteMany (RWX) アクセス) を作成します。

使用するドライバー (RBD または CephFS) の判断は、**storageclass.yaml** ファイルのエントリーに基づいて行われます。

8.5.3. 利用可能な動的プロビジョニングプラグイン

OpenShift Container Platform は、以下のプロビジョナープラグインを提供します。これらには、クラスターの設定済みプロバイダーの API を使用して新規ストレージリソースを作成する動的プロビジョニング用の一般的な実装が含まれます。

ストレージタイプ	プロビジョナープラグインの名前	注記
OpenStack Cinder	kubernetes.io/cinder	
AWS Elastic Block Store (EBS)	kubernetes.io/aws-ebs	複数クラスターを複数の異なるゾーンで使用する際の動的プロビジョニングの場合、各ノードに Key=kubernetes.io/cluster/<cluster_name>,Value=<cluster_id> のタグを付けます。ここで、 <cluster_name> および <cluster_id> はクラスターごとに固有の値になります。
AWS Elastic File System (EFS)		動的プロビジョニングは、EFS プロビジョナー Pod で実行され、プロビジョナープラグインでは実行されません。
Azure Disk	kubernetes.io/azure-disk	
Azure File	kubernetes.io/azure-file	persistent-volume-binder ServiceAccount では、Azure ストレージアカウントおよびキーを保存するためにシークレットを作成し、取得するためのパーミッションが必要です。
GCE Persistent Disk (gcePD)	kubernetes.io/gce-pd	マルチゾーン設定では、GCE プロジェクトごとに OpenShift Container Platform クラスターを実行し、現行クラスターのノードが存在しないゾーンで PV が作成されないようにすることが推奨されます。

ストレージタイプ	プロビジョナープラグインの名前	注記
VMware vSphere	kubernetes.io/vsphere-volume	
Red Hat Virtualization	csi.ovirt.org	



重要

選択したプロビジョナープラグインでは、関連するクラウド、ホスト、またはサードパーティープロバイダーを、関連するドキュメントに従って設定する必要もあります。

第9章 ボリュームスナップショット

ボリュームスナップショットは、特定の時点におけるクラスター内のストレージボリュームの状態を表します。これらのスナップショットは、毎回フルコピーを作成する必要がないので、より効率的にストレージを使用するのに役立ち、アプリケーション開発のビルディングブロックとして使用できます。

ボリュームスナップショットクラスを使用すると、管理者はボリュームスナップショットオブジェクトに属する異なる属性を指定できます。OpenShift Container Storage Operator は、使用されるプラットフォームに応じてデフォルトのボリュームスナップショットクラスをインストールします。これらのデフォルトボリュームスナップショットクラスは Operator によって所有され、制御されるため、削除したり変更したりすることはできません。

同じ永続ボリューム要求 (PVC) のスナップショットを複数作成できますが、スナップショットの定期的な作成をスケジュールすることはできません。

- CephFS の場合、PVC ごとに最大 100 スナップショットを作成できます。
- RADOS Block Device (RBD) の場合、PVC ごとに最大 512 スナップショットを作成できます。



注記

永続ボリュームの暗号化がボリュームのスナップショットをサポートするようになりました。

9.1. ボリュームスナップショットの作成

Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) ページまたは Volume Snapshots ページのいずれかからボリュームスナップショットを作成できます。

前提条件

- 一貫性のあるスナップショットを使用するには、PVC は **Bound** 状態にあり、使用されていない必要があります。スナップショットを作成する前に、必ずすべての IO を停止してください。



注記

Pod が使用している場合、OpenShift Container Storage は PVC のボリュームスナップショットのクラッシュの一貫性だけを提供します。アプリケーションの一貫性を保つために、まず実行中の Pod を破棄してスナップショットの一貫性を確保するか、またはアプリケーションが提供する静止メカニズムを使用してこれを確保します。

手順

Persistent Volume Claims ページで以下を実行します。

1. OpenShift Web コンソールで、**Storage** → **Persistent Volume Claims** をクリックします。
2. ボリュームのスナップショットを作成するには、以下のいずれかを実行します。
 - 必要な PVC の横にある Action メニュー (⋮) → **Create Snapshot** をクリックします。
 - スナップショットを作成する PVC をクリックし、**Actions** → **Create Snapshot** をクリックします。
3. ボリュームスナップショットの **Name** を入力します。

4. ドロップダウンリストから **Snapshot Class** を選択します。
5. **Create** をクリックします。作成されるボリュームスナップショットの Details ページにリダイレクトされます。

Volume Snapshots ページで以下を実行します。

1. OpenShift Web コンソールで **Storage → Volume Snapshots** をクリックします。
2. **Volume Snapshots** ページで、**Create Volume Snapshot** をクリックします。
3. ドロップダウンリストから必要な **Project** を選択します。
4. ドロップダウンリストから **Persistent Volume Claim** を選択します。
5. スナップショットの **Name** を入力します。
6. ドロップダウンリストから **Snapshot Class** を選択します。
7. **Create** をクリックします。作成されるボリュームスナップショットの Details ページにリダイレクトされます。

検証手順

- PVC の **Details** ページに移動し、**Volume Snapshots** タブをクリックしてボリュームスナップショットの一覧を表示します。新規スナップショットが一覧表示されていることを確認します。
- OpenShift Web コンソールで **Storage → Volume Snapshots** をクリックします。新規スナップショットが一覧表示されていることを確認します。
- ボリュームスナップショットが **Ready** 状態になるまで待機します。

9.2. ボリュームスナップショットの復元

ボリュームスナップショットを復元する際に、新規の Persistent Volume Claim(永続ボリューム要求、PVC) が作成されます。復元される PVC はボリュームスナップショットおよび親 PVC とは切り離されています。

Persistent Volume Claim ページまたは Volume Snapshots ページのいずれかからボリュームスナップショットを復元できます。

手順

Persistent Volume Claims ページで以下を実行します。

親 PVC が存在する場合に限り、Persistent Volume Claims ページからボリュームスナップショットを復元できます。

1. OpenShift Web コンソールで、**Storage → Persistent Volume Claims** をクリックします。
2. ボリュームスナップショットと共に PVC 名をクリックし、ボリュームスナップショットを新規 PVC として復元します。
3. **Volume Snapshots** タブで、復元するボリュームスナップショットの横にある Action メニュー(:) をクリックします。

4. **Restore as new PVC** をクリックします。
5. 新規 PVC の名前を入力します。
6. **Storage Class** 名を選択します。



注記

Rados Block Device (RBD) の場合、親 PVC と同じプールが指定されるストレージクラスを選択する必要があります。暗号化が有効でないストレージクラスを使用して暗号化された PVC のスナップショットを復元することや、その逆はサポートされていません。

7. 任意の **Access Mode** を選択します。



重要

ReadOnlyMany (ROX) アクセスモードは Developer プレビュー機能であり、Developer プレビューのサポート制限の対象となります。Developer プレビューリリースは、実稼働環境で実行することは意図されておらず、Red Hat カスタマーポータルのカース管理システムではサポートされません。ReadOnlyMany 機能に関してサポートが必要な場合には、ocs-devpreview@redhat.com メーリングリストに連絡してください。Red Hat Development Team のメンバーが稼働状況とスケジュールに応じて可能な限り迅速に対応します。ROX アクセスモードの使用については、[Creating a clone or restoring a snapshot with the new readonly access mode](#) について参照してください。

8. (オプション) RBD の場合、**Volume mode** を選択します。
9. **Restore** をクリックします。新規 PVC の詳細ページにリダイレクトされます。

Volume Snapshots ページで以下を実行します。

1. OpenShift Web コンソールで **Storage** → **Volume Snapshots** をクリックします。
2. **Volume Snapshots** タブで、復元するボリュームスナップショットの横にある Action メニュー (⋮) をクリックします。
3. **Restore as new PVC** をクリックします。
4. 新規 PVC の名前を入力します。
5. **Storage Class** 名を選択します。



注記

Rados Block Device (RBD) の場合、親 PVC と同じプールが指定されるストレージクラスを選択する必要があります。暗号化が有効でないストレージクラスを使用して暗号化された PVC のスナップショットを復元することや、その逆はサポートされていません。

6. 任意の **Access Mode** を選択します。



重要

ReadOnlyMany (ROX) アクセスモードは Developer プレビュー機能であり、Developer プレビューのサポート制限の対象となります。Developer プレビューリリースは、実稼働環境で実行することは意図されておらず、Red Hat カスタマーポータルの場合管理システムではサポートされません。ReadOnlyMany 機能に関してサポートが必要な場合には、ocs-devpreview@redhat.com メーリングリストに連絡してください。Red Hat Development Team のメンバーが稼働状況とスケジュールに応じて可能な限り迅速に対応します。ROX アクセスモードの使用については、[Creating a clone or restoring a snapshot with the new readonly access mode](#) について参照してください。

7. (オプション) RBD の場合、**Volume mode** を選択します。
8. **Restore** をクリックします。新規 PVC の詳細ページにリダイレクトされます。

検証手順

- OpenShift Web コンソールから **Storage** → **Persistent Volume Claims** をクリックし、新規 PVC が **Persistent Volume Claims** ページに一覧表示されていることを確認します。
- 新規 PVC が **Bound** の状態になるまで待機します。

9.3. ボリュームスナップショットの削除

前提条件

- ボリュームスナップショットを削除する場合は、その特定のボリュームスナップショットで使用されるボリュームスナップショットクラスが存在している必要があります。

手順

Persistent Volume Claims ページで以下を実行します。

1. OpenShift Web コンソールで、**Storage** → **Persistent Volume Claims** をクリックします。
2. 削除する必要があるボリュームスナップショットがある PVC 名をクリックします。
3. **Volume Snapshots** タブで、必要なボリュームスナップショットの横にある Action メニュー (⋮) → **Delete Volume Snapshot** をクリックします。

Volume Snapshots ページで以下を実行します。

1. OpenShift Web コンソールで **Storage** → **Volume Snapshots** をクリックします。
2. **Volume Snapshots** ページで、必要なスナップショットの横にある Action メニュー (⋮) → **Delete Volume Snapshot** をクリックします。

検証手順

- 削除されたボリュームスナップショットが PVC の詳細ページの **Volume Snapshots** タブにないことを確認します。

- **Storage → Volume Snapshots** をクリックし、削除されたボリュームスナップショットが一覧表示されていないことを確認します。

第10章 ボリュームのクローン作成

クローンは、標準のボリュームとして使用される既存のストレージボリュームの複製です。ボリュームのクローンを作成し、データの特定の時点のコピーを作成します。永続ボリューム要求 (PVC) は別のサイズでクローンできません。CephFS および RADOS Block Device (RBD) の両方で、PVC ごとに最大 512 のクローンを作成できます。

10.1. クローンの作成

前提条件

- ソース PVC は **Bound** 状態にある必要があり、使用中の状態にすることはできません。



注記

Pod が PVC を使用している場合は、PVC のクローンを作成しません。これを実行すると、PVC が一時停止 (停止) されないため、データが破損する可能性があります。

手順

1. OpenShift Web コンソールで、**Storage** → **Persistent Volume Claims** をクリックします。
2. クローンを作成するには、以下のいずれかを実行します。
 - 必要な PVC の横にある Action メニュー (⋮) → **Clone PVC** をクリックします。
 - クローンを作成する必要がある PVC をクリックし、**Actions** → **Clone PVC** をクリックします。
3. クローンの **Name** を入力します。
4. 任意のアクセスモードを選択します。



重要

ReadOnlyMany (ROX) アクセスモードは Developer プレビュー機能であり、Developer プレビューのサポート制限の対象となります。Developer プレビューリリースは、実稼働環境で実行することは意図されておらず、Red Hat カスタマーポータルの場合管理システムではサポートされません。ReadOnlyMany 機能に関してサポートが必要な場合には、ocs-devpreview@redhat.com メーリングリストに連絡してください。Red Hat Development Team のメンバーが稼働状況とスケジュールに応じて可能な限り迅速に対応します。ROX アクセスモードの使用については、[Creating a clone or restoring a snapshot with the new readonly access mode](#) について参照してください。

5. **Clone** をクリックします。新規 PVC の詳細ページにリダイレクトされます。
6. クローン作成された PVC のステータスが **Bound** になるまで待機します。クローン作成された PVC が Pod で使用できるようになります。このクローン作成された PVC は dataSource PVC とは切り離されています。

第11章 CONTAINER STORAGE INTERFACE (CSI) コンポーネントの配置の管理

各クラスターは、**infra** や **storage** ノードなどの数多くの専用ノードで設定されます。ただし、カスタムテイントを持つ **infra** ノードは、ノードで OpenShift Container Storage Persistent Volume Claims (永続ボリューム要求、PVC) を使用することができません。そのため、このようなノードを使用する必要がある場合は、容認を設定してノードで **csi-plugins** を起動することができます。詳細は、<https://access.redhat.com/solutions/4827161> を参照してください。

手順

1. configmap を編集して、カスタムテイントの容認を追加します。エディターを終了する前に必ず保存します。

```
$ oc edit configmap rook-ceph-operator-config -n openshift-storage
```

2. **configmap** を表示して、追加された容認を確認します。

```
$ oc get configmap rook-ceph-operator-config -n openshift-storage -o yaml
```

テイント **nodetype=infra:NoSchedule** の追加された容認の出力例

```
apiVersion: v1
data:
[...]
```

CSI_PLUGIN_TOLERATIONS: |

```
- key: nodetype
  operator: Equal
  value: infra
  effect: NoSchedule
- key: node.ocs.openshift.io/storage
  operator: Equal
  value: "true"
  effect: NoSchedule
[...]
```

```
kind: ConfigMap
metadata:
[...]
```

3. 独自の **infra** ノードで **csi-cephfsplugin-*** および **csi-rbdplugin-*** Pod の起動に失敗した場合、**rook-ceph-operator** を再起動します。

```
$ oc delete -n openshift-storage pod <name of the rook_ceph_operator pod>
```

例:

```
$ oc delete -n openshift-storage pod rook-ceph-operator-5446f9b95b-jrn2j
pod "rook-ceph-operator-5446f9b95b-jrn2j" deleted
```

検証手順

csi-cephfsplugin-* および **csi-rbdplugin-*** Pod が **infra** ノードで実行されていることを確認します。

